

※目次

あいさつ

佐藤研究室M1プロジェクト顛末記

佐藤時啓

佐藤研究室M1プロジェクトの、そもそもの契機は偶然に向こうからやって来たものである。中村政人氏が保有するセクスイハイムM1ユニットを使った'07年度の取手アートプロジェクトにおいて、ゲストとして研究室からプランを提案し、それが実現することになったのだ。しかし偶然に受けたプロジェクトではありながら、それをきっかけとしつつ、現在の研究室メンバーのポテンシャルによって、ユニークかつ集中しうるプロジェクトに発酵させたとあって良いだろう。

M1ユニットとは、高度成長期の象徴的住宅風景の一つとも言える工場生産によるユニット住宅である。私の研究室は、基本的にアートを思考する事を中心としているものの、その手段では写真映像から書、彫刻と幅広く緩やかなメンバーが集まっている。したがってそのユニットを必ずしも建築的意味合いとしてとらえる事に拘泥されずに自由に思考、発想したといえる。

ミーティングでは、最初はそれぞれの作品の展示空間としての可能性を考えることから始まった。しかし、次第に個々の作品としてではなく、ユニットそのものの可能性を思考するようになって行った。雰囲気としては楽しみながら隠れ家の夢を語るような話から、ツリーハウスのような空間を作りたいという希望があがった。そしてユニットを空中に浮かせる事を中心に話しは進んだ。現実性を加味して最終的には全てが空中に浮くのではなく、4つのユニットがそれぞれの重さと重力によって、互いにもたれ合うような形で45度の角度で固定されその接合部分の空中に隠れ家的な機能を持たせようという事になった。極めて彫刻的な発想なのではあるが、単にモニュメンタルなものを作るのではなく、何がしかの機能を持たせる事が前提となっていた。それは、45度の斜面ができたことにより、自然にすべり台や、クライミング面、などのアスレチック的な機能が発想されていった。

個人の内側に閉じる作品としてではなく、作品を通じてなんらかの他者への働きかけを行いたいという思いは研究室の基本姿勢である。写真であろうと彫刻であろうと何であろうと他者の存在を前提とした表現を考える事が大切であり、今回はたまたま鉄という物質を使った空間的にパブリックな作品になったのだ。その基本とメンバーとの対話の中から研究室メンバーのモチベーションが高まっていった。

制作を実現させる上で最初の課題は構造的な強度の面であった。話し合いの段階では、積み木を動かすようにして可能性を自由に発想したが、現実にするためにはクリアしなければならない多くのポイントがあった。ユニットそのものの腐食や傾斜させて使う事を考慮していない構造など検討すべき点は多かった。そのためにも最初に吊り実験をおこなった。大学ピロティのホイストを使い45度の角度で吊り上げてみた。この実験によって、様々な点が具体的に見えた。強度の十分さと不十分さ。実際に制作を始めるにあたって、3点を明確にした。底面横方向のチャンネル鋼の強度補強。ユニット全体の斜め方向への歪み補強。腐食部分の除去および補強。トラス材とブレースを加える事と新材で置き換えることで対処した。構造計算を行わなかったが、その分過剰ともいえる補強を行った。

プロジェクト全体を通じて手で動かす事にこだわった。最終的に作品の完成形を得る事だけに拘ったわけではない。唯一将来的に継続可能な価値があるとすれば、それはプロセスにおけるさまざまな体験である。そのプロセスの意味合いを高次元で体験したかった。学生達にそのような経験を与えたいという願いと同時に私自身の可能性のハ-

ドルも超えたいと欲したのだ。歴史的なピラミッド建設の神秘とロマンは、数多く語られてきた。現代においても解明されていない古代の人力による建築技術。モノと身体の関係。いかに建設されたかは想像するしかないが、知恵と物理法則のみで、50トンを超える巨石さえも動かすことができたらしい。わずか0.5トンのユニットをクレーンで吊ってしまっただけでは面白くない。テコとコロ、そして滑車と手動ウインチで組立を行う事にした。手で動かすには遥かに重いものを工夫して手道具だけで動かそうという事を考えた。デザイン的には、古代マヤやアステカのピラミッドといったところか。お互いが知恵を出し合い、方法を考え、手と手道具だけでうまくいった時には胸がすく思いがした。

大学のカリキュラムとしては、スキルに関する特別な時間は余り無い。したがって各自の引き出しを増やすためには経験を増やすしか無いのだが、その時間をこういったプロジェクトで与える事が重要だと私は考えている。今回は、ユニット補強のための溶接が大量にあったために、研究室の全員に溶接スキルが身に付いた。また、重い物の動かし方やクレーンの玉がけについても体験した。遣り形をつくることによっては、水平、直角の出し方を学んだ。肉体労働としての土木作業もこなした。何よりも単管を組んでやぐらを使い、滑車とウインチで大きなユニットを引き上げた事は私自身の想像世界が現実化されたことでもある。今後何かに具体的に役に立つ事は無いかもしれないが、イメージを組立てそれを工夫し現実化するプロセスは全ての事に有効であり重要な事だと信じている。

2007年11月、利根川の土手に白く輝くユニットの雄姿が出現した瞬間はそれまでの重労働の辛さをすっかり忘れさせてくれた。共同作業によって個人の喜びが参加者数に乗じて分かち合えたひと時だった。そして何よりもあの作品によじ登り滑り台を滑りエレベーターで遊び、貴重な時間を過ごしてくれた多くの人々、御家族の笑顔をお忘れしない。

そして、このプロジェクトの端緒になった中村政人氏、プロジェクトを実現させていただいた取手アートプロジェクト実行委員会、そして研究室メンバー始め多くの参加者の皆様に感謝したい。

佐藤 時啓 (さとう ときひろ)

美術家、写真家

1957 山形県酒田市に生まれる

1981 東京芸術大学美術学部彫刻科卒業

1983 同大学大学院美術研究科修士課程修了

1993 ダイムラーアートスコープ受賞によりフランス滞在

1994 文化庁在外研修員としてイギリス滞在

2005 文科省先進教育研究実践支援プログラムで米国滞在



メタユニット__M1プロジェクト

9組のゲストプランナーとのコラボレーションにより、ユニット住宅セクスイハイム M1 を再利用して、建築や景観のあり方を提案。市内外に設置される M1 サイトによりまちの隙間から小さな都市計画がはじまります。

※セクスイハイム M1 とは、住居やオフィスなどの用途に合わせ、鉄骨ユニットを配置するだけで出来る建築物。1970 年に生産が開始され、量産化住宅として全国に 1 万世帯あり、日本の景観を作る重要な建築物として日本のモダニズム建築 100 選に選ばれました。

※ギャラリーページ

※→ 1 ページにまとめられそう。

MI アスレチックピラミッドについて

「アスレチックピラミッド」佐藤時啓研究室

「アスレチックピラミッド」中村さんコメント部分

取手アートプロジェクトも9年目を終えた。取手駅東口駅前の区画整備事業完成を機に、取手校地に新設されたばかりの美術学部先端芸術表現科からの提案により1999年に始められたこのプロジェクトも、この間に大きな成長とそれなりの変化を遂げて、今では大学と自治体との地域連携事業の代表的取組みとして社会的な評価を受けるまでになった。2004~2006年までの3年間、音楽学部音楽環境創造科熊倉純子准教授により実施されたアートマネジメント養成講座「TAP塾」で、取手市内外から集まってきた大勢の人材が経験を積み、現在では彼らが実質的にTAPを担うまでに育っている。それと引き換えに、先端芸術表現科が授業の一環として科をあげて取り組んだ当初の体制から次第に撤退していった結果、先端のみならず美術学部の教員・学生たちのTAPへの関わりが薄くなってしまったことは否めない。TAPの発案者として一貫して関わってきた私にとって残念至極であり、作家を志す学生たちの積極的な参加を促すことが、ここで何より必要なことだと思われた。中村政人准教授に、セキスイハイムM1ユニットを用いたプロジェクトをTAPで展開できないかと提案した背景にはこういう事情があり、それはM1のシンプルなフレームに大勢の制作意欲を触発するに違いない実体感と様々な展開可能性を感じたからこそでもあった。そして私のこうした期待に最大限に応えてくれたのが佐藤時啓研究室である。「アスレチックピラミッド」は、間違いなくTAP2007で最も見応えのあるプロジェクトであった。実は佐藤時啓研究室にとってTAPは初めての経験ではない。すでにTAP2000において「移動するカメラ」プロジェクトで研究室として参加、「カメラ」は取手で展示された後、全国を回っている。学部生だけだった2000年に比べて今回は大学院も加わり、よりパワーアップした研究室のチームワークが制作の全行程で見られた。危険を伴う作業に慣れない学生を指導しながら、このプロジェクトをとり仕切った時啓さんのリーダーシップに感心するばかりである。利根川の堤を背景に、夜毎にライトアップされて着々と進行する設営プロセスは、それ自体が見事なスペクタクルとして我々の脳裏に焼き付いている。TAP2007記録集には紙面の関係上掲載できなかった制作過程が、こうしてドキュメントとしてまとめられることを共に心から喜びたい。

中村政人
(東京芸術大学美術学部准教授 M1 プロジェクトプロデューサー)

渡辺好明
(東京芸術大学美術学部教授 TAP2007 実施本部長)

佐藤時啓研究室 MI プロジェクト座談会 副題：制作の裏側本音トーク

2008年1月24日(木) 東京芸術大学上野先端教員室にて午後6時より

佐藤：今回、進行役として笠島君に来てもらい、建築家というキャリアを持った人に客観的に見てもらいながら、我々の研究室でやった事を総括したいと思います。笠島くんには意見を挟みながら進行してもらえたらと思います。

笠島：僕もM1プロジェクトの話が佐藤研に行く前に、取手アートプロジェクト(以下TAP)の渡辺先生から話を聞いていて、M1ユニットを使って何かやるというのは知っていたのですが、佐藤研はどんなきっかけで、何処からそういったプロジェクトをすることになったのですか。

佐藤：まず佐藤研が4月に始まって、4月の終わりごろに大学院1年のメンバーがこれだけ入ってきて、是非今年は色々な事をやろうという気持ちがあった時に、菊地君がTAPに関わっていて、何回目かのミーティングでM1プロジェクト(以下M1)やりましょうという話がでたんだよね。

菊地：そうですね。

佐藤：今年、前期に場所を考えるプロジェクトを1つやって、そのあと後期にM1をやりましょうという話が上がったというのが経緯ですね。

笠島：なるほど、わかりました。菊地君としては、話を佐藤研に持っていった時にやろうとしていたイメージというのは？

菊地：TAPにもともと興味があったので4月に説明会に参加して、今年はM1フレームを使って個人の作家というよりはグループにオファーをかけていってという話を聞いて、研究室でも考えられるのかなと思ったのがきっかけです。本当に最初は軽い気持ちで、こういった話がありますぐらいの感じで話しました。

佐藤：そうだね。最初は全然具体感はなかったんだよね。言葉でやろうっていうノリだけで。何が出来るかがあんまり考えてなかった。

桐生：前期にトランクトランス展※1があったじゃないですか。トランクトランス展でやっているようなものを、もう一度M1ユニットという場を使って展示するのかな、というのが僕の最初のイメージだったんですよね。

小澤：M1ユニットの中にそれぞれが自分のスペースを区切って、そこに各自の表現を取り入れて一人一人が提示するというアイデアだったと思います。

笠島：はたから聞くと、そういうことをやりそうな研究室というか、「写真の」というイメージがあったのですが、佐藤先生としては院1が動きそうな人間が入ってきたから、違う可能性を探れるかなと。

佐藤：トランクトランス展をやったときも、全体の雰囲気は上手く動けたんで、M1も本格的に出来るかなとは思ってたよね。

笠島：では展示ではなく、作りこんでいく方向に行こうとした時の反対意見みたいなのはなかったんですか。

桐生：案を出してきて欲しいという話になって、菊地君が実際紙に起こしてプランを練ってきてくれたのね。これいいじゃんということで、方向性が一気に決まったと思う。

菊地：一番初めに、みんなそれぞれ考えて持ち寄ろうというミーティングがあって、その中で僕が考えたのはM1ユニット自体をどうにかしてしまおうという発想で、それにメンバーがノッてくれたというか。

佐藤：9月になって、とにかく集まってプラン出そうという話になって。そのときに出た案というのはすごく限られていたわけだね。菊地君のが一番具体的で、あといろんな人から出てきて。でもそのとき出てきたものは、建築をベースにする人とは発想が全く違っていて、本当にあのユニットをブロックみたいに発想していた。一番最初に出ていたのは、とにかくあれを浮かそうよという話で結構盛り上がっていったんだよね。

小澤：そのときのミーティングのテンションが、さっき笠島君が言ったような個人で云々するという、そっちの方に話が傾きはじめて、僕の中でもそっちの方にテンション上がっていった。

佐藤：元木は最初どう思った？

元木：すんごい楽しかった。

一同：笑

元木:木に浮かすとか・・・なんか前代未聞。自分の中でそんなのやったことないし、どうやるんだろうとか・・・

佐藤：だから、僕の中の気懸かりとして、元木なんかは本当に写真やってるわけ

じゃない。写真やってる人が何人もいてさ、物を作るという事が日常茶飯事じゃない人もいるわけで、そこでこういう物を作る事を全体で共有できるのかな。という不安はものすごくあったわけだね。

佐藤：それに対してのノリが良かったのかな。みんな。

笠島：じゃ意外とすんなりとという用語がありますが、面白そうだからというのが多かった？

小澤：僕も全然やったことないし、どれくらい大変なものか想像も出来ないから・・・。とにかく、面白い方向に心が行ってしまった。

一同：笑

菊地：本当にアイデアが沢山出て、簡単な模型を作ってあーだこーだやってたらイメージが出来上がって。

佐藤：2回目のミーティングで完全に決まっちゃったんだよね。この時みんなも良いて・・・でも丁度良かったのがそのあと合宿できたんだよね。その時にみんなで話を詰めることが出来た。それで仕事の分担とか決まって、本気でいけそうな感じになったんだよね。

菊地：そうですね。プレゼンボードを急いで作ったのは、TAPの説明会がすぐにあって。最低限見れるものを出して欲しいというので、僕が急いでプレゼン用に。笠島：僕としては客観的な立場から見ている面白い。作業は大変だったとは思いますが大丈夫。でもなぜこのプランというか、佐藤研なのにこれに決まったか・・・

一同：笑

笠島：それが面白い部分だなと思っていて。プラン出しの時には多少写真的な、例えば佐藤先生の作っているピンホールカメラのようなバビリオンのなものを意識してたのかとか、或いは全く関係なくM1ユニットを使ったパブリックアートとして何があるべきかなど考えていたのか、もうちょっと詳しく聞きたいです。

佐藤：今の話というのは実際あって、僕自身もやはり僕自身の色が出てくると最後にはカメラになる(笑)。今までの経験上、そうしちゃうとどうしても研究室みんなの総意というよりは、僕の仕事に手伝うみたいな雰囲気になってしまうことがどうしても強い。それだったらいかんという気持ちがあったから、今回はそれは絶対やめようと思ったのね。それは良かったなあと思ってるんだけどさ。あとやはり今回大学院生中心だったから自分の意思というかスキルも含めて、すごいそれがはっきりしていたからすごくやり易かったというのはあったね。

桐生：菊地君はもともと入学前動めてたじゃない、だからデザインして脳内にあること、また紙であるものが、建物になっていって場になるというのを経験として持ってるから、だからああいう建築物みたいな大きなものを構想として提示できたんだと思うよ。

菊地:でも、もともと最初のA案(20Mの土壁トンネル型カメラオブスキュラ)のアイデアは桐生さんだったんです・・・

桐生：え、本当に。

一同：笑

菊地：土壁をみんなで塗って、みんなで作ったら面白いというアイデアを出したのは桐生さんで、それが結構きっかけになった気が、僕はしてるんですよね。

佐藤：そうだね、それが最初のきっかけ。であれば別の事(ボックス型アートとは違う)も出来るんじゃないかという話になったのかな。

菊地：このA案がありながらB案も出たのは、そういう意味もあって。最初A案はカメラにもなっていて、もっと別な発想という意味で結果的にA、B案の2案になった。

小澤：最初A案はアート色が強くて、でももっと地域の人を楽しめる事も大切じゃないかという話もあって、アスレチックみたいな方向にもっていたんだけど。

佐藤：ただ、本当にこの浮かす案がね、最初のTAPの説明会でみんなに承認されるとは思わなかったわけ、実は。

一同：笑

佐藤：やりたいのはアスレチックピラミッドだったんだけど、やっぱり構造の裏づけとか、そういう事で問題になるだろうなと思っただけど。意外に・・・いっ

ちゃったんだよね。

桐生：佐藤先生がプレゼンしたから、誰も何も言わない(言えない)感じで、それならきっと大丈夫だろうという。

菊地：そう暗黙の空気が・・・。

佐藤：あはは・・・笑。いや、最初に、昔セキスイハイムの基礎工事をやってた事とかも言ったからね。

桐生：建ったらすごいよね、とか中村政人さんの反応もあったもんね。説明会で・・・。いや建ったね・・・。凄いね。

笠島：じゃあ、研究室の外の人に見せたときも、ピラミッド案の方が受けが良かったと。

佐藤：そうだね。結局。大変だろうけどなって反応があっただ。

笠島：では、ある種の研究室内でウケが良かった感じが、そのまま外からも同じようにあったと。

佐藤：ただし、その時の雰囲気は、僕らが全部やるとは思っていなかったと思う。一同：笑

佐藤：あれは、当然ながらさ、工務店なんかが入ってやるんだろうという雰囲気だったと思うんですよ。

笠島：それで細かい作業を研究室でやったりと。ではそのプレゼンをTAPの説明会でやった時にアスレチックピラミッド案で決定という事になっていったと。

佐藤：そうですね。

菊地：この説明会の後、すぐに現地視察という候補地探しになって。そのときは既にアスレチックピラミッド案でどう置いていくかという視点になっていた。佐藤：それで、いい場所が見つかったんだよね。

佐藤：池田君が最後の一番厳しいときに手伝ってもらったけど、あれは元々どういうきっかけだったの？

菊地：あれはIMA 概論※2で池田君と授業と一緒にあって、話をしていたら先端の事に興味持ってくれて。それで一度工芸科の棟に遊びに行ったんだよね。その後にM1の話をして。M1の作業に入る段階で、池ちゃんガテン系だから助っ人やってくれないかなって。どうですか？

池田：俺は凄く楽しくて・・・。

桐生：一番山場の時に来たんだもんね。徹夜&雨の時ですもんね。

池田：とても新鮮でした。考え方だとか。自分だったらと考えた時、絶対に普通に箱みたいなものって考えちゃう所だから。組んでるなんてとても新鮮だったし、本当になんか大きい彫刻みたいなものじゃないですか。あんなでかいのしかも人力でやってるし。

佐藤：いや、最初のミーティングの時と随分違ったよね。最初のミーティングはさ、外注してみたいなことも言ってたし(笑)。

桐生：外注とボランティア無くなったのね。

一同：笑 なんだったんだあの話は。

笠島：その理由は何だったの？予算とか時期のタイミングの話？

桐生：予算の問題もあったんでしょうけど、他所に手配するより自分達でという気持ちか・・・。

山口：楽しくなっちゃったんです。

佐藤：あと、やりながら雰囲気がとってても良かったよね。だから別にいいじゃん。みたいな(笑)。

佐藤：やはり肉体労働の充実感というものはあるよね。これが普段だとなかなか体験できないからね。

小澤：石山さんは途中までまだクレーンとかはやってもらった方がいいんじゃないのとか不安がってて、少し相談受けただけ。

桐生：石山さんと藤本君が日本大学の建築の佐藤慎也先生の所に聞きに行ってくれたんだよね。今のM1の状態だったら、斜めにして立ち上げることが耐久性の上で難しいという事と、残っているM1自身の状態がひどいし、これらがネックになるというような事を聞いてきて、石山さんも藤本君もかなり戦意が喪失しちゃったと・・・。だから僕もそれを聞いてちょっと無理なんじゃないのって。島：日大の佐藤慎也先生の所に行って、直接話を聞いてきた石山さんの感想は。

石山：もうダメッという感じで。絶対補強が必要で、最初にM1ユニットの強度をよく分かっていなかったの。あと、もともとM1ユニットが持っていた強度にしても、腐食が進んでいるから尚更だめだろうって。これで人が死んだらどうすんだ的なこと言われると、慎重にいかざるを得ないって、先生に直ぐに電話して、これはなんか全然感触が良くなかったんでどうしようという話をして。僕は凄く心配したんですけど、先生は大丈夫でしょって。

一同：笑

佐藤：それはなぜ大丈夫だと思ったかと言うと、とりあえず実験から始めようという意味だったの。大丈夫って言ったわけじゃないんだよ。だから実験しながらGOしようという意味で、それで吊ってみたり色々やってみて。実際に腐ってるユニットもあったしね。だから当然これは駄目だなとは思っだし、それをどう補強したらということを考えながら作っていこうとしたわけだね。だから全く無謀な事とは思っていない。

笠島：話をちょっとまとめると、全て自分達の力のみで進めようと思いき進んでいく上で、どのへんから「これはちょっとマズいな」と思ったのか。途中から皆にかなりしんどそうな表情がみられたのですが。

桐生：いや、大変だったのは寒さ。寒さを感じるようになってから僕はつらさを感じたね。体が動かないの。

菊地：各学年がそれぞれ展覧会を抱えていて、その合間をめてって参加していたので全員集まれる機会は少なく、作業が深夜に及んでしまう事もしばしばあった。

笠島：時間的に厳しく作業が午後から始まってしまう事などは予想外でしたか？

桐生：作ってるときはもう少し早くできるものだと思っていた。最後の方は2〜3時間しか寝れない時も結構あったし、徹夜もあったのでキツイ。

菊地：10月一杯はまだ22時位には終わって夕食に行くのが定時だったが、11月に入ってからは徹夜が増えてしまった。しかしもうやるしかないという感じだった。

桐生：当初先生は「徹夜はやらない、8時で終わる。遅くなくても能率が悪くなってケガ人がでるだけだ。」といていたのに・・・。でもケガ人がでなかったのは本当に良かった。

佐藤：ケガ人が出なかったのは、みんな緊張感をずっと持っていたし、周りでみていた人達もそう言っていたよ。

元木：誰か死ぬかと思った・・・絶対。怖かった。

石山：みゆきちゃんがいかに心配性がよく分かった。

佐藤：みんなしんどかったかもしれないけど、どうしても実現したい夢があった。ウィンチで持ち上げるとか。基礎を作りたかったんだよ、もの凄く。外注なんか絶対ヤダったんだよ。一応それが反対も無く・・・。

菊地：いや、基礎はいつ発注するんだろうと・・・。

桐生：知らない間にそうなってたんだもんね。

佐藤：基礎ができたのはTAPの予算で水平・垂直を出せるレーザーを買ってもらったからなんですよ。それで大地に寸分の狂いの無い糸を張れた。それは凄く嬉しかった。菊地君の図面が非常に正確で毎日制作してきてくれたのもあってできました。

小澤：クレーンの吊り上げ実験をしたときに、つられた部分の鉄骨がかなり歪んだんで、例え図面通りにできたとしてもうまく合わないんじゃないかと心配しました。

佐藤：メディア教育棟がこの実験ができる環境で良かったし、何より鉄のフレームを自分たちの力で動かす事に成功したのが良かった。写真の世界にいたので彫刻家のように重い石を何とかしたり運んだりする事に憧れがあった。みんなも手で動かせた時は感動していたよ。

小澤：僕の場合建築の知識など全く知らないで、先生がウィンチを使うと言ったら、それが最善の手段なんだと信じていた。

桐生：試行錯誤の中でドラマや人間関係がうまれた。モノを作るということを実感しやすくなった。

笠島：ピラミッドに限らずモノを作る事という基盤にまで還元できていればいいのでしょうか・・・。完成してみてもうでしたか？予想外だった部分がありました

か？

小澤：僕らがお客さんの対応の準備をする前から、おじいさんなどもロッククライミング斜面などもガンガン行ってしまうのでどうしようかと思いました。

菊地：オープンして直後にTAPツアーの大群がやってきて20人近く一斉に登ってしまった。結果的に人でテストした状態になりましたが、そこでピクともしなかったので大丈夫だと思いました。

笠島：ワークインプログレスでやってきた身としては意外とできてしまったら寂しかったですか？

佐藤：僕自身の意見として、最後は完成図で求めたところまでできなかった事が寂しかった。屋根の部分やテントを側面に張るところまで作業予定があった。しかしオープンしてからはさすがにみんな予定があってできなかった。

笠島：僕としてはこの状態まででベストだと思ったのですが。

佐藤：結果的には出来た所までがベストだと思う。しかし、全部やってみなければどこの過程までがベストだったか分からないので・・・。会期最後の打ち上げでストーブを上へのステージに上げてみんなで座ってやっと区切りがついた気分だった。計画自体が欲張りだったのだと思う。

石山：例えば基礎を外注していたりすれば、全て完成していたと思います。しかし、今思えば手作業を経験してこまですてきた事の方が価値として貴重だったのではないのでしょうか。やってみなければわからない事がたくさんある。

桐生：作業中、休憩のラーメンとかコーヒーが本当に助かった。

菊地：朝の5時位にも食へに行きましたね。最後には毎日行っていったガストも閉まってしまったと。

伯耆田：食べ物はかなり重要でしたね。

笠島：オープン当日に最低限の形で持っていったという事にみんな納得しているのですか？

佐藤：世の中思った通りにはならないし、勿論みんな納得はしているんじゃないかな。90％は実現しているし、後は欲張った部分で発想したものは全てできた。笠島：はたから見ている意見としては、4つのフレームがあからさまに組み合わせられてきているのが見える部分が面白いところで良かったのではないかと思う。枠組みというモノが直結していた。そういった部分で100％は無くても良かったのでは。

佐藤：そこが狙いだったのですが、最後にテントを張りたかった理由としては、床を張った時点で床同士が連結しているように見えたので、再びユニット固体を際立たせるために張ってみたかったな。

笠島：では、最後は今回のプロジェクトの問題点や、反省点を考えていきたいと思います。プロジェクトの初期段階の話ですが、僕にとって佐藤研は写真系の研究室という印象が強いのですが、M1ユニットを使ったアスレチックピラミッドを制作するという事に対してメンバーから疑問や不満などネガティブな意見はなかったのですか。

石山：研究室の在り方として僕が思っていたのはやはり各々の制作を深めることがメインであり、そのために先生やメンバーとディスカッションすることで各々の作品を深めるというイメージがありました。M1プロジェクトに参加すると決まった時に事前審査会とアトラス展と時期が重なっていたので、僕自身としては個人の制作を優先したいと思いましたし、他のメンバーにも少なからずそのような気持ちがあったのではないのでしょうか。しかしメンバーが少ない中でやると決まった以上、どこまで自分が関われるのかと思っだし、僕は最後までM1プロジェクトを自分の制作の中心には出来なかった。ただ、全て終わってみるとフラットに見えてきて、当初自分がモヤモヤしていた部分がどうでもよく思えるし、M1プロジェクトの制作プロセスを経験したからこそ今の自分の修了制作が実現できたと思う。結果的には洗濯機にぶち込んで回された事がよかったのかと思います。でもやはり今後のゼミの在り方としてメンバー内で最初の段階で確認しておいた方がいいと思う。

笠島：やはり最初はネガティブな気持ちがあったわけですかね。

石山：自分の活動を並行してやれるのだろうかという不安がありました。

笠島：実作業に移ると楽しい面もあると思うのですが、そこでモヤモヤは消えましたか？

石山：作業やってる時は忘れますよ。楽しいというか夢中だし緊張感もありますし、没頭して遣り方ってこうやるのか、穴掘るのって大変だな、猫車で重いなとか考えながらやっているとかモヤモヤは消えるんだけど、帰宅して事前審査のことを考えると精神的に落ちてしまい、またM1作業の日になるとまた忘れてやれるような感じでしたね。逆に作業の中から自分の制作のヒントをもらう事もあり

ましたね。

笠島：藤本君はどうですか。最初の段階では。

藤本：僕も本当に（このプロジェクトを）やるのか・・・というような状態でリアリティがなかったです。卒業制作展でデザインの担当をしており、中心になって進めなければいけない重要なポジションだったんです。その作業のピークが重なっていたので、結果的にはあまり参加できなかったので後ろめたさを感じます。

笠島：それは元々藤本君がイメージしていた研究室の活動が、全員で何かをやるというイメージがなかったからですか？

藤本：そうですね。最初はもっと個人の制作を落とし込む形という話が出ていたのでその方向だと思っていました。

笠島：やるとしても個人の制作が繁栄させるものだと思っていたんですね。微妙な後ろめたさだけが残ったような。そういう意見もあるのであれば今後のやり方も色々展開の仕方はあるんじゃないでしょうか。伯耆田君はどうでした今回のプロジェクトについて。

伯耆田：結局最後にこのプロジェクトに参加するかしないかを決めたのは自分なので、僕の場合は両方後悔しています。自分の制作とM1プロジェクトのどちらも中途半端な形になったと思っています。両方頑張ったつもりではあるんですけど。そこは自分の力が足りないかと本当に思います。自分でもよく分からないです。ただ両方楽しかったです。

笠島：両方楽しかったけれど、両方中途半端になってしまったという気持ちがあると。かと言ってどちらかに偏るとまた後ろめたさが残るのかもしれないですけど。

伯耆田：でもこんな事が出来る研究室って他にないと思うんです。それが凄い貴重なことだと思います。山口さんどうですか。

山口：感想になってしまいますけど、基礎のための穴掘り・M1のペンキ塗りが終わるところまでしか参加できなかったんです。事前審査とぶつかってしまったので。でも本当にM1の方が楽しくて参加していたので事前審査の作品を全然やっていなかったんです。10日前くらいからずっと個人制作に移ってしまったのでM1に来なくなってしまったので、前半はM1、後半は事前審査という形になってしまいました。

佐藤先生：前半のマドンナ（山口）と後半のマドンナ（元木）だよ。

一同：笑

山口：本当はユニットを上げるところを見たかったし、単管を組んだりするのをやりたかったです。それも勉強になると思ってやりたかったんですけど見れなかったので、もう少し時期が合えばよかったなと思います。

佐藤：学内展とピッタリの時期だったからね。

笠島：具君はどうですか。そもそもプロジェクトに参加する時点の意見であったり、ゼミの活動としてイメージしていた部分がどうだったのかを聞かせて欲しいです。

具：僕は昔から一人で作業してモノを作るという事に慣れてしまっていたので、みんなで作業することに慣れていなかったんです。研究室を選ぶときに、初めに先生に「僕は一人で作業する方が向いているので、研究室ではみんなで作業するような事はありますか」と聞いたんです。すると先生は「いや、そういう事はないよ」と仰っていたんですね。

一同：爆笑

具：M1の説明会に参加した時に「えっ!？」とっていて、とにかく何かを作るという事に興味はあったので、これはやってみると凄く楽しいんではないかと直感的に感じていて、出来上がっていくのを見守るという形で参加したいと思っていたんです。ずっと作業していると段々流れが見えなくなってきて、明日こままでやれば来週には終わるだろうというのが段々ずれてきて、それと並行してアトラス展の自分の作品や展覧会の写真記録担当の仕事のスケジュールもずれていって、一番後悔しているのはスケジュールの調整がうまく出来なかった事です。一応、やってよかったなと凄く思っていてこれを生かしていきたいです。

笠島：具体的には何を得られました？

具：一人ではなく人と関わって作業をするというコミュニケーションや、そういう状況で自分がどういうポジションでいれがいいのか、など勉強できました。技術的な事はどこでも学べることだと思うので。

笠島：ということは今後自分の立場を考えて写真を撮ったりすることが出来るようになるかもしれないという事ですか？

具：そうですね。写真の場合も今自分が作っている作品というのは、本当に自分

一人が撮って作品にするという事が多いので、今後もし写真の仕事をする事になれば勿論一人ではいけないわけで、コミュニケーションの技術がスキルアップできたと思います。

笠島：分かりました。元木さんはどうですか。

元木：凄く勉強になった。知らない事いっぱいあったし・・・。女一人じゃ出来ないし学生だからこそ出来たと思う。

笠島：このタイミングでしか出来なかったと。

元木：うん、よかった・・・(ハート)。

一同：笑

笠島：なんか最後にハートマークがついてたけど。

笠島：一平君はどうですか？

田中：僕は3年生なので作業をする中で一番いい位置にいたと思います。他の全員が上の学年でそれぞれ仕事を持っていた人もいて、作業を通じてそういう部分を見る事が出来るというのが凄くいいなと思っだし、最初にこのプランを見た時も、そういうのを見たいと思えて取り組めました。

笠島：違和感はなかった？

田中：そうですね、ただ自分の制作もあって学年での展覧会もあり、同時並行ではありました。もし心残りがあるとすればやはり同時並行で進んだ中で、自分の制作もまだハッキリ描けていない部分があるので、集中し切れなかったところがありました。もし集中できていれば違うものになったかもしれないのはあります。ただ、M1で感動したのは図面と模型という建築の考え方なんですよ。これまで自分の中ではエスキスやメモみたいな事はありましたが、あまりそういうところを考えた事がなく、キッチリ形が見えている中で制作していくというのは凄くいい作り方だなと思いました。

笠島：無駄がない感じで。

田中：そうです。これをどうにか自分の仕事にも転用できないかと思いました。それさえ出来ていればある程度出来ているという事になるのでそこを詰めていけばいいんだなと。

田中：勿論経験がないと難しいと思いますが、そういう事を間近で見れたのが凄くよかったです。

笠島：菊地君はどうですか。

菊地：僕は正直なところ、最初は大学に入ってまでこんな事をするとは思わなかったという気持ちがありました。ただ、それまでやってきたデザインの仕事と大学での仕事が繋がりました。考え方であったり制作するプロセスだったり、別に何も違わないんだと。それが凄く個人的にこのタイミングで研究室のみんなでモチベーションを持って取り組めて共有できたというのが一番良かったですね。これまではプランをして図面を書いて作業としては終わっていたものが、今回は大学あるいは研究室という所だからこそみんなで作れた事が凄く良かったです。あとみんなが極限状態に陥っていたのが面白くて、余裕がない状態になると包み隠さずそれぞれの素が出てくると。これがもしお互い自分のベースで仕事をしていると見えてこなかった部分なんじゃないかと。今回は本当にもう全員がギリギリのところに関わっていたので、議論したりするだけでは出てこない持ち味のようなものが出て、途中から得意分野が見えてきて。

佐藤：よく見えたよね。

菊地：プロジェクトとして完成させたという事もあるけれど、研究室としてみんなが持てる限りの力を結集させるということがなかなか他では出来なかったことではないかと思いました。

笠島：意地悪な聞き方ですが、仕事でやってきた事と同じになってしまって損した気分とかはなかった？

菊地：それはやっていく中で考え方が変わっていきました。

笠島：違ったアプローチで出来た？

菊地：実際にやっている内容としては、仮設の構造物を作るという意味では一緒だけど、こんな切り口で進めていくというかハッとさせられた部分がたくさんありました。

笠島：小澤君はどうですか。

小澤：僕も具君と同じように、先端に入るまではずっと一人で映像を撮ったりメディアアートをやっていたんですけど、なんかずっと物足りない感覚があって、展示を見てめぐえず、なんかもっと飛びぬけたぶっちぎったものを見たり体験したいという気持ちがありました。先端にわずかな期待を寄せていたんです。実際にM1をやってみて、自分達としてはかなり突き抜けたものが出来たなと思えて凄く満足です。たぶん、これでやったことで先端に来た甲斐があったと思いま

す。卒業した後でもきっと思い出すのはこういう事だと思います。やってみて、自分が全く想像できないものを作るというのは初めてで、これまで自分の頭で想像したものは大体出来上がるので、それで収まってしまうことが多かった。もし出来ないと思って、なんとかする手段を探して妥協しないという幅が広がったことが得られた事です。あと、メンバー全員が全員のことをよく見れて、全員を尊敬できるようになりました。それが学生ならではで、ものづくりをする人達が集まってそれぞれの素晴らしいものが見れたことがよかったです。

笠島：その学生ならではというのは一度社会に出た事があるからこそ感じますか。

小澤：僕の会社にはものを作る人・アーティストがいなかったので、志が同じような人たちが力を合わせるという事はなかなかないと改めて思いました。

笠島：それと同時に、学生になってまた一人で制作できるのに、みんなでやるとなった時のストレスはなかったの？

小澤：僕はないですね。逆に社会に出たら一人でやるしかないじゃないですか。活動はしてましたけど。孤独との戦いというか。でも大学は仲間でも出来ることがすごく貴重。ただ仕事であればどんなに両方忙しくても両方こなすのが当然で、そこで甘えられないし、今回の経験は良かったです。菊地君も言っていました。極限状態というのが久しぶりに僕も味わえてそれが面白かったです。また一人の制作に帰ったときにも自分一人だからといって妥協は出来ないし、これをやったんだからそのレベルまでやらざるを得ないという気持ちになりました。

笠島：じゃあ時間もそろそろ迫ってきたので・・・

桐生：僕まだじゃないの（笑）。こんだけメモしてるのに。

笠島：それを知ってたから、長そうだしやめておこうかなと。じゃあ桐生さんお願いします。

桐生：それぞれの制作にどう活かせるのかという事もあるじゃない。僕自身は、M1を制作するに当たって獲得した技術であったり素材の特性についての知識を自分の制作に応用しようというスタンスではないんです。

笠島：それは別ということですか？

桐生：別ですね。溶接なんて僕はもう一生しないと思ってるの（笑）。

一同：笑

桐生：溶断もしないし、基礎も作らないコンクリも見たくない（笑）。あんなに重いもの捨てて。先生なんか砂利持って腕おかしくしてるんですよ。そういう酷いことはもうあるわけがない。それは置いておいたとして、技術や素材の特性などよりも僕が勉強になったのは思考の方法で、モノを作る時の出来上がるまでのアルゴリズムや組み立て方、手順や発注するタイミング・業者の探し方や素材の集め方などの「方法」と「手段」において獲得できたと思っています。あと、M1という出来事がなければ研究室のメンバーが単なる場の共有という過ぎ去っていく人達になってしまうのではないかと感じていたんです。ただの同居人というか・・・。それが今回のようなハードな出来事を通じて同志となり、頼る頼られるという家族に似た関係が出来ました。遅くなって一平君が帰れないから僕の家に泊まったり、僕の家が合宿所みたいになってました。そこでの人間関係が生じて、ハード（M1）を通してソフト（人間関係）が変化して生じたものの方が得るものが多くて、場の形成という意味でうまくいったなと。

笠島：マイナス面あるいは今後もやっていくべきだとは思いますが。

桐生：でもM1はもう二度とやりたくないですよ。

一同：笑

桐生：ハードだった。でもハードじゃないと自分の枠を越えられないし自分を見極められない。自分がどこまでついていけるのか。だからハードなことはあってもいと思うし、嫌な気はしない。一人だとハードを避けてしまう。みんなですることによって自分にとってハードルの高い部分をこなしていくという意味で自分の精神的なスタンスが上がっていくと思う。だから僕は良かったなと思ってます。

笠島：では池田君はどうですか

池田：僕はちょうどこういうプロジェクトみたいなものに興味があったので、参加を通じてこんな事ができてしまうんだと感じて、やはり自分は好きなんだと確認できてよかったです。

笠島：転入しようかなみたいなの？

池田：そうですね（笑）。溶接しているのがびっくりしました。先端のことをよく分かってなかったので、何でも出来ちゃう人達なのかと。別に建築家じゃなくても建築が出来るというのは頭では分かっているけど実際にそれをやられてビックリしているというか。基礎も含めて出来てしまっていて。自分の価値観を広げるきっかけになったかなと思います。

MI 座談会

笠島：先生最後にどうですか。

佐藤：僕は今まで作家活動をしてきて思うのは、自分から何かやろうとしてきた事もあるけどそれは少なくて、投げかけられてきた波をどう乗りこなそうかというほうが多いわけ。今回のM1というのも非常に偶発的で、たまたま色んなきっかけがあったものなんだよ。それをどうやって乗りこなしていくか、という取り組み方でその後がかなり違う。僕は出来るだけ高い波をかってよく乗りこなしたい。やり始めたら徹底してやらないといけないと思うしやろうとしたんだよ。そういう意味では、その事によって時期的にみんなが辛かったと思うし大変だったと思うけど、得られるものが多かったと僕自身は思う。自分で選んだものではなく、偶発的なことによる体験や価値観ってすごく大切だと今思っている。みんなにとってM1は自分で選ぼうと思ったら選ばなかったと思うけど、やる前は興味なくてもやってみたら何か得られるという事だと思うんだよ。僕の人生の強い体験でプロジェクトという事で言うと、大学に入って山岳部に入った事がすごく大きい。なぜかという、自分たちで計画を立てて、いかに困難を越えて雪山を登っていくかに安全に帰ってくるかという事をリアルタイムでプランニングしながら限界で遭難ギリギリになるわけだけど、極限状況で嫌な部分が見える人もいれば尊敬できる部分が見える人もいるわけじゃない。そういう極限状況ってなかなか経験することがない。結果的にM1がそういう状況になってしまったね。徹夜もするつもりはなかった。色んな問題があって反省事項はいくらでもあるんだけど、僕の経験でいうと問題点って忘れてしまうわけで、いいことだけしか残っていかない。そんな感じで僕は今回のプロジェクトを捉えています。

笠島：先ほど石山さんが言っていた、事前にメンバーの同意を得られているかという部分が問題だと思うんですね。今回は多分、事前の合宿などで暗黙に同意は得られていたとは思うんですけど。

佐藤：今年こんなに動くとは思わなかった。

笠島：それだけ研究室としていい空気作りにはなっていたという事ですよね。

佐藤：勿論、メンバーが20人くらいいれば、学部4年生と院2年生は参加しないでやろうという話が出来たかもしれないけど。

笠島：という事はまた大きなプロジェクトがありますねこれは？

佐藤：投げかけられれば、それにどう答えようかというのはあるよね。

笠島：でもそれも研究室の空気みたいなものがあるからこそ起こるんじゃないでしょうか。

佐藤：あと偶然性が凄く大きいからそんなに出来ないよ。あれで僕が海外行ったらできなかつたよね。じゃあ今年何やろうか。海外で何かやろうか。

笠島：いいじゃないですか。あ、時間も差し迫ってきましたのでここら辺で閉めたいと思います。

一同：ありがとうございます。

※1
佐藤研究室制作プログラム　トランク トランス： <p>限定されたユニークな場所や条件を考え選択し、佐藤研究室メンバー全員で新たな表現を試行するプロジェクト。</p> <p>研究室のメンバー11人が同じトランクケースを用い、そこでそれぞれの個性を活かした制作と展示を行った。</p> <p>[佐藤研究室 wiki より]</p>

※2
IMA 概論： <p>先端芸術表現科常勤教員が、順次、それぞれの活動の紹介と共に、その背景となっている思想、考え方、方法論などについて講義する。</p> <p>[東京藝術大学平成19年度授業計画より]</p>

司会進行：

笠島 俊一（東京芸術大学美術研究科先端芸術専攻修士1年生　木幡研究室）

座談会参加者：
佐藤 時啓
石山 和広
小澤 貴弘
菊地 拓児
桐生 真輔
具 滋龍
元木 みゆき
藤本 涼
伯耆田 卓助
山口 実加
田中 一平
池田（東京芸術大学美術学部工芸科一年生）